

2023年11月12日 久宝教会 礼拝メッセージ

「神の選びの基準」

牛田匡牧師

聖書 詩編 105編 7-15節

先月10月7日に、イスラエルとパレスチナのガザ地区にいる過激派組織ハマスの戦争が始まり、一ヶ月以上が経過しました。日々のニュースでは非戦闘員であるガザ地区に住むパレスチナ人の人々の犠牲が増え続け、もはや1万人以上の方が亡くなったと報じられています。そのうちの約半数は子どもたちです。国連のグテーレス事務総長は「ガザは子どもたちの墓場になっている」「ガザの悪夢は(もはや)『人道危機』を超えて、人類の危機だ」とまで述べています(11月6日)。

「天上のない監獄」と言われるような高い塀に囲まれた人口密集地域であるガザ地区では、イスラエル側からの電気、燃料の供給が遮断され、井戸水をくみ上げることも出来ない状態だそうです。建物の半数が破壊され、病院も下水処理施設も破壊されています。数えられない程のものすごい回数の空爆に続いて、イスラエル軍の地上部隊による地上侵攻も始まり、被害は拡大しています。イスラエル人の人質を盾にしているハマスに対して、人質の解放を訴えるイスラエル側の言い分もありますが、国際世論が訴えている通り、一刻も早い停戦が必要です。

イスラエルの閣僚の一人は、「我々はナチスに人道支援を行うつもりはない。ガザ地区にハマスに関わっていない者などいないからだ」とガザ地区に対する人道支援の必要性がないことを述べ、さらにガザ地区に核爆弾を投下することも「選択肢のひとつだ」と述べたそうで、そのことについては国際的な批判も高まっていますが、このままではガザ地区が滅ぼし尽くされる大虐殺になってしまいます。しかし、たとえ、地図から国や町が消え、そこに住んでいた民族があたかも初めから存在しなかったかのように歴史が書き換えられたとしても、残された人々の憎しみの連鎖は消えません。事実、第二次世界大戦の後から何度も繰り返された中東戦争、イスラエル・パレスチナ問題自体が、そのことを証明しています。

報道では、「イスラエル対パレスチナ」という単位で報じられがちですが、実際には戦争の継続を望んでいる人々は、双方の極一部の過激派の人たちだけなのだと思います。イスラエルの中でも現任のネタニヤフ首相への批判も高まっているそ

うですし、そもそも多民族共生の場所であったイスラエルを、ユダヤ人に約束された土地として、ユダヤ人だけの国家として強引に建国していることに対しても、当のユダヤ人の中からも「それはおかしい」という意見もあるそうです。これだけ多くの人々の血が流されて続けている惨劇の中で、命の源である神様の約束、神様の計画とは、一体どこにあるのでしょうか。

今回の聖書の言葉、詩編 105 編は、古代イスラエルの人々が、自分たち民族は、どのような歴史を持っているのか、自分たちはどこから来てどこへ向かっているのか、という自民族の出自やアイデンティティが表されている箇所の一つでした。アブラハム、イサク、ヤコブという古代イスラエル民族の父祖たちと神との約束、それは 11 節にある「私はあなたにカナン之地を与え、あなたの相続地とする」というものでした。その聖書の言葉に基づいて「現在のパレスチナが、今から何千年前の古代よりイスラエル民族、ユダヤ人に約束された土地だ」という原理主義者、極右思想の人たちがいるわけです。ですが、ヘブライ語聖書を読んでも、古代イスラエルの民が移住する前から、カナン之地にはカナン人たちがいて、現在の「パレスチナ」の語源にもなっているペリシテ人たちもいて、アラブ世界の多くの他民族がその地に昔から暮らしていたということが記されています。

それにも拘らず、古代イスラエル人たちが、民族の自己意識として、聖書にこのように「自分たちは神様から特別に選ばれ、守られて来た」と書いて来たのは、12 節 13 節にあるように「その数は少なく、数えるに足らず、その地に寄留していた」から。そして「国から国へ、一つの王国から他の民へと歩いて行った」からに他ならなかったからではないかと思えます。つまり、人の目から見たら、取るに足らない、数えるに足らない、小さな小さな弱小部族であり、いつ滅んでもおかしくないような古代イスラエルの民たちが、歴史の闇の中に消えて行って忘れ去られてもおかしくない、そんな一つの弱小民族であったにも拘らず、今も生かされているのは何故か。それは神様からの特別の守りがあり、選びがあったからだ、という理解だったのではないのでしょうか。申命記 7 章 7 節には、神の選びの基準が記されていますが、地上にいる全ての民の中から、古代イスラエルの民を選び出され、神の宝の民とされた理由は、「あなたがたがどの民よりも数が多かったから、主があなた

方に心引かれて選んだのではない。むしろ、あなたがたは、どの民よりも少なかった」からだ」と述べられています。

詩編 105 編の 13 節以降には、「国から国へ、一つの王国から他の民へと歩いて行った。主は、彼らを虐げることが誰にも許さず、彼らのゆえに王たちを懲らしめた。『わが油注がれた者たちに触れるな。わが預言者たちに害を加えるな』」と記されていますが、これらの言葉は裏を返せば、古代イスラエルの人たちはずっと国を追われ、定住・安住の地を持たない難民であり、どこへ行ってもその地の権力者たちから虐げられていた。自分たちの中の油注がれた指導者たちも預言者たちも迫害されていた、という歴史事実があったということでしょう。そのような迫害、窮乏という現実の中で、人々は自分たちの苦難の原因を「神様から与えられた律法を守っていないから、このような迫害に遭っているのだ」と考え、その結果、「律法に立ち返れ、神の御心に立ち返れ」ということが、何度も何度もヘブライ語聖書の中で繰り返され、イエス・キリストの時代にまで至りました。

何百年、何千年という時代の変化の中で、当然政治状況も異なれば権力者も異なります。また自然環境も気候も異なりますから、当然、そこに暮らす人々の考えも変わります。今から約 2000 年前のイエス様の時代には、人々は神に従う、律法を守るという中で、何が清くて何が穢れているか、といういわゆる「清浄規程」がとりわけ重視されていた時代だったようです。それらの掟を守ることが、神様に従うこと、神様の御心に適うことだと考えられて推奨されていました。しかし、それは同時に、掟を守ることの出来る人と守ることの出来ない人、清い人と穢れた罪人という二つに人々を区別し分断するものでもありました。

そしてイエス様自身は、その出生の時から穢れた罪人の一人として誕生し、それらの貧しい罪人の一人として成長し、そしてそれらの仲間たちの間で、彼らと共に生きられました。その結果として、十字架につけられて殺されましたが、神はイエス様を死者の中から復活させられました。それによって、生と死、清浄と不浄という隔ての壁が取り壊され、差別と分断に基づく私たちの罪が贖われ、永遠の命へと至るキリストの平和が与えられました（エフェソ 2:14-16）。

ヘブライ語聖書、ユダヤ教の中心は、貧しくされ、小さくされている者たちの痛みに対する神の共感であり、イエス・キリストはご自身のその身をもって「痛みを共

感する神」「小さくされた者の側に立つ神」を表された方でした。自分たちが小さく、弱く、絶滅寸前であったからこそ、神がその目を留め、祝福された古代イスラエル民族でした。それが時代を経て今日「自分たちこそ神によって選ばれた特別な存在だ。だから敵対する異民族は滅ぼしても構わない」と、この聖書の言葉を根拠にして主張しているのだとすれば、それは神の御心を無視した、表層的で自分勝手な誤解でしかありません。神の選びの基準、それは常に今、力を奪われ、弱く小さくされている人たちに向けられています。

「自分たちに正義、大義がある。神は自分たちと共にある」と豪語しながら、相手の陣地を爆撃したり、目の前の相手に銃口を向けたりする時、果たしてそこに神様はおられるのでしょうか。むしろ神様は、爆撃によって町も家も破壊され、水も食糧も医薬品も事欠く中で、避難し、救援を待っている人たちと共に、「神も仏もあるものか」と嘆いておられる、その方々の中に共におられるのではないかと思います。

11月も中旬を迎え、日に日に陽は短くなり、肌寒さを覚える季節になりました。教会の暦も「降誕前節」に入っていて、もう来月にはクリスマスを待ち望む「待降節(アドベント)」です。地上が最も暗くなる季節に、神様から与えられた一つの光……。イエス・キリストは今、どこにおられ、誰と共におられるのでしょうか。そして、この時代を生かされている私たちもまた、イエス様に従う者として、イエス様がその隣におられる方々と、共にある者とされるように導かれていきます。